

「血潮したたる主のみかしら」(ヴァルターによるアレンジ)

この曲は1601年に書かれたハンス・L・ハスラーによる「パッション・コラール」と名付けられた旋律をもとに作られました。詞は12世紀にラテン語でかかれた原詞を基に、ドイツ人のゲルハルトによってドイツ語に訳され、1656年に発表されました。ちょうど、ドイツ各地で宗教改革によって会衆賛美が盛んにおこなわれるようになったこともあり、ドイツ各地の教会で歌われたそうです。また、およそ70年後に、かのバッハ(J.S. Bach, 1685~1750)がマタイ受難曲でテーマとして繰り返し用いたことでも有名です。

この時期のオルガンによるコラール前奏曲として、たくさんのアレンジが残されています。今回はヨハン・ゴットフリート・ヴァルターという、後期バロック音楽の作曲家(Johann Gottfried Walther, 1684~1748)によるアレンジです。ヴァルターはバッハとお友達であり、遠縁の親類でもあったということで、ワイマールの宮廷オルガニストとして活躍しました。レント(受難節)にふさわしい歌詞の内容とメロディにより、今もなお歌いつがれています。

新生讚美歌221番「血潮したたる」より

1. 血潮したたる 主のみかしら とげにさされし 主のにかしら
悩みとはじに やつれし主を われはかしこみ きみとあおぐ
2. 主の苦しみは わがためなり われは死ぬべき つみびとなり
かかるわが身に かわりましし 主のみこころは いとかしこし

